

史論

元

米山

L156

サ

嘉永庚戌新鐫

本道要論

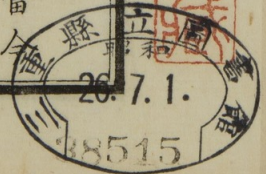
完

造士館刷印



自序

孔子曰。觚不觚。觚哉。觚哉。蓋歎物失其舊也。余於當今。悠悠之士。亦私有此歎。遂不敢自量。述此書以諭後游之士云。夫士以武為質。幹職任。雖分其業。則同。作原士第一。凡人有此業。則有此風。故其風一定。而後其業可守。兵作士風第二。風之所由。在於氣。故其氣一奮。而後其風可恃。兵作士氣第三。有氣無節。欲益反損。故其節一立。而後其氣可用。兵作士節第四。氣節之源。出於心。先浚其源。而後其流可洪。兵作士心第五。心有公私。唯其心之恃。而其道之不求。可耶。且士之職。有以奉上。有



以臨下。上下之交。豈可各無其道哉。作士道第六。蓋士以武為業。而其職必資於文。文所以知道也。士而知道。能事畢矣。以為篇之終。然道外無事。一文一武。莫非道者。故合而名之。曰士道要論也。蓋士道雖廣。不文武。苟知其不可偏廢。則職業舉矣。論雖平平。庶得其要。歟。讀者勿以其語淺字假。輕視之可矣。

天保八年龍集。丁酉秋八月。

齋藤正護

士道要論

原士

士乃職くさうくさうく民を治る任あり、財を掌るとる官あり、文  
学顧問と備つるものあり、侍御扈從をつとむるものあり、下土厨  
庖倉庫貯とる雜司といつるものあり、於士と名付て兩刀を佩し、  
さうく不慮と備つるものあり、亂のおこり冠の出来るものあり、  
於戈旅  
扱く事と從ふべき定あり、於せんくを武士といふあり、或人難く  
んく、  
文武官をとり、  
古制あり、  
官と文武を

りきさねはつし事あねは公卿大臣はとねる天子皇太后もつう  
軍をひきあへく乱賊をうちあへしむいあへい外國まとも  
む事しむるもありきこう天子皇太后も士卒の將とねりむい  
ぬれを公卿より下つて文武の事とねるもあへし中昔より  
こねり天子九重の内とねりさへい公卿大臣以下も大むね膏梁  
の子弟もて金鼓の聲をきけは頭をちとねるをふさげくおち  
あへしこの困よりつてとねるもあへし源平ねるの家あへく  
とねる兵革のそねつてとねるもあへし夫より縉紳の人  
思ひあへし武事をむてとねる卒徒の任との思ひあへし遂はた  
つて人の物具つてたり古よりやとさよ物もあへし

好いといふ思ひあやまらざるや、さうも武を多てするに西土隋唐の世より見  
之にすして西土のいふハ元氏傳にも國之大事ハ在祀典戎と云ふとい  
て天子徳後も古平の將と好いて征伐するに古のいふおまきよ  
よく似たり、うく天子徳後も古平乃將とあり、武をとて職と云は  
古の武をとて名とするともいふなり、好くは且士といふ文字を  
考ふるに古訓も事とあり、事に戎事より大ききあるに、事と  
のいふに戎事をむと云ふ論語に將有事於顯史と云ふ  
事の戎事と云ふ沈好く、礼も大司成のいふ事、春秋も有事於  
大司成、社をて、歸りて、事といふ、故に  
諸士の職多き好く、兵刑をつとめる官のいふに古に云ふ  
尚書に皋陶士の官をとて、帝夷の夏を猶ほるを平らけ冠

賊の姦宄形々をせし詰りてをてあてて用の世とてつて  
 獄のつてて武士師とて其属官は郷士逐士好とありてつてれも暴  
 をつてむ多をともて職とて周官とてえつてこれとて武  
 をむ祀とて祀とて大御名のつて美真手ひまこの命 神武帝  
 乃御時天の物部をひきあてて平らけ多ひ又用の物部を  
 ひきあててつて天皇詔とて世と物部乃職を継とてえつて  
 たいと舊事記日本紀あててつてつて物部はとてのつて又  
 美葉集とてのつてつて物とて兵をつてむつて書とて兵卒を  
 物共とて武具を物の兵とて後の世もと兵士のつて物部王物部  
 ちとつてつてつてつてつてつて物部は即武士好とて

後の世の奇如倍ちとて  
 武士とてつてつてつて



然<sup>レ</sup>ハ、<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>士を事とよめ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>略お似<sup>レ</sup>たり<sup>レ</sup>。武士の名源平氏<sup>ノ</sup>と  
し<sup>レ</sup>やれ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>。さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ナ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ  
す<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ハ、天子諸君大夫と武を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>秘<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。其<sup>レ</sup>富を<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>專  
軍役を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>て、萬<sup>レ</sup>葉<sup>レ</sup>千<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>葉<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>一國の内上下<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>役<sup>レ</sup>の  
内<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>。され<sup>レ</sup>ハ、<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>一葉<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ハ、甲士三人歩卒七十二人  
と<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>歩卒ハ農民<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。將<sup>レ</sup>ハ、即<sup>レ</sup>士<sup>ノ</sup>將<sup>レ</sup>也。又<sup>レ</sup>公卿大夫<sup>ノ</sup>は、將<sup>レ</sup>と  
り<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>ハ、公卿大夫<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。世<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>、公卿の子<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。友<sup>レ</sup>と  
つ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。内<sup>レ</sup>ハ、<sup>レ</sup>士<sup>ノ</sup>あり<sup>レ</sup>。禮<sup>ノ</sup>士冠<sup>レ</sup>襟<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>。公卿大夫<sup>ノ</sup>は、冠<sup>レ</sup>礼<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ハ、<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>師<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>。西<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>。公卿大夫<sup>ノ</sup>は、  
武家<sup>ノ</sup>の名<sup>ノ</sup>あり<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>武家<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>。武<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也。

よう好く詩の國風周南に赴く武夫公侯干城といひまゝ公侯腹心と  
 してこれ武を干城といひ腹心といふ中世はハツテ侍と  
 してこれ袖の人乃僕隸のまゝ好くあつてこれひみくれば  
 事愛の會り及びく武人遂に大君のすゝめ好く公家の令に  
 権柄を失ひまじぬとて公家の士の名義を失ひく武事を  
 不しくあつてこれ公家の士既に過りてあはれいふ云  
 へる余は兼平の久き武士とてこれむりて公家のまゝに  
 あり申さんともを忍ぬくかといふ好くおぼしき武をいふみまぢむ  
 ようしてこれ其切位をわきて之をさうやあり武の著く切位あ  
 りてこれ天祖の寶劍をく之をいふ佐に武の古位をのりてこれ

ありしに、さねに神聖天下を治めしむるに、又事武備を利しむる事は  
 両端を以て兩翼の如く、世儒の如くは湯武の征伐を以て、堯舜の  
 揖讓を以て、武を第二義と思ふも亦よし、然れども堯舜より先  
 ついて黄帝より武を以て天下既定し、その如く禮樂を治  
 の沙汰し、及んで好り、帝國を以てあり、仁徳履仲の列聖衣裳を  
 以て、天下を治るる如く、神武崇神、應神、武甕槌、命等をして  
 是れを以て、干戈を用ひし事、経津主命武甕槌命等をして、  
 あらざるに、後の太平を以て、又阿蘭陀を以て、先と以て、  
 猛獸鷲を横行する時、人の爪牙の利もあらず、其中に、弓矢  
 劍を飛く

禽獸を制し、人類を繫ぐ一法あり。此武のなり。先あり、人常と法  
より乱れを治むるの思へ、開闢のなり。ゆより、常より乱より  
治よりむるなり。武功あり、其の法を施すなり。一、其の法を用ふ  
の序次を考ふるなり。乾坤のち、乃ち蒙需訟の四卦を  
經く師とあり、屯乃艱なり。蒙の穉き、開闢のなり。先あり、其つぎ  
需乃飲食をとり、訟の争ひをひきつゝ、屯師の軍旅を興す  
うち平らくるなり。屯師の次は比あり、比より、小畜履  
の二卦を經く、泰となり、離卦は師憂比衆とあり、比の衆を  
とるなり。師の憂苦より、乱を治るなり。屯師より、小畜より、  
物を畜ふなり。比より、後履の禮より、泰の衆平をいふなり。

今の士大夫師の憂多く比乃樂あり、泰の安きより居り、租を食し税  
を衣くや、世を了りては、祖先の武乃切治より後、あつとし  
武乃切治を口より、孺奢あ逸よ、泰盛より否の乱をあらは  
し、されば、否乃次ハ否の卦あり、この初よりハ、泰の吉より、人を  
おそく、師の憂苦を思ひ、又、この卦象の至險を大頌乃中より  
よほり、この心を思ひ、武を太平乃とよきより、す、國家の為よ  
爪牙とも腹心とも、なるべき、たゞにこそ、

士風

士大夫の四民のそと、なり、上ハ君子、下ハ民、上臨む、その風、正し  
く、なり、士風、正し、この禮義、廉恥を、む、初より、ま、なり、近世

士風より下りたる驕奢よりあはれつる懦弱よあぢりたり。礼義廉  
恥乃ち之を失ふはこれなり。此弊風を正さんとす。夫は質朴強毅  
の風を尚んで、後世に義廉恥の風をも好む。一旦質朴強毅、武士の  
本色より、國家乃ち爪牙とあるも、亦も亦もあはれつる。あはれつる  
風より、少くも之を好むはこれなり。士林にあるもの三歳の童子にして、  
弱きを恥らひ強きを慕はらざる。ふぢい。畏れ驚くあはれつる。ハ  
徳病と云ふ。いづれ恥あらざる。此一人に強きも弱きも。於生質あはれ、  
す。そののひひつる。強きをむねと。弱きをきつる。ひあはれ。驚  
つる。も。いづれあはれ。早も。色も。いづれ。あはれ。たの。いづれ。  
と。平也。さす。も。好む。た。も。驚き。怖れ。六。散。つる。矢玉乃

さよよ向のく槍をいれ太刀をふりてかきとをきりてさよよ  
 ましきとととれうととれ一足はひく君の馬前とてうち死せし我  
 弟乃職分とてし弟乃の面目ともきぬ常こ此風をすまうとて  
 勇氣をなやあひ雷霆をなめて騒ぐは風波をみへく疑はぬ赤山  
 前もつととも色雲せさうとてあうより武をいふきは此風とて  
 あうしを太平とてくちつとて此風とつとてき士乃ありと  
 意と息労苦をさそ基とていひ武は婦女子のこく蛇をあらぬを  
 おくはくともれもあり齊藤實盛と西國の士をあらうとて軍と  
 つとて夏はあつとていひをいふとてきかといひよとてあ  
 すと同一人かれは家業疾痛の苦も畏れとてとてかきとてかりぬと

名をくく一職を辱しむるを忍ぶれども其をくくはつてはむかぬ等  
 ありてはしむるをくく我慢なりてはむかぬ等ありてはしむるをくく  
 ありてはしむるをくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 ち切むるをくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 とも心は善夫善女に宋儒の氣質變化の況ありて常々心掛けて  
 弱きもつてくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 弱きもつてくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 將去とてくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 將去とてくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 を行ひ、於夕より其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 後光明帝の秘し、書を忍ぶるをくく其の風俗を國家の盛衰にかけ  
 其の風俗を國家の盛衰にかけ、書を忍ぶるをくく其の風俗を國家の盛衰にかけ



いふふ〜、強毅の風を行ふ、まづ質朴儉素の風をまゝり、  
了、士の懦弱よりやうやう、驕侈華麗の流もなやう、まづ質朴  
儉素の風をまゝり、おのつゝ、強毅堅忍の風も近う、まづ、さねら  
農夫、田中より力化して、其風も質朴なれば、高賈もくらくなれば、心を  
剛より身も健なり、やうやう、士の風も農夫より近き、まづ、高賈も  
似て、いふふ〜、まづ、小祿を負窮、まづ、やうやう、まづ、生活  
の助をまゝり、まづ、商人のまづ、まづ、まづ、川より漁より、まづ  
狩り、田を耕し、圃をゆる、米をうけつゝ、薪をくわへ、おのづから、  
まづ、まづの士、近き、何某家、まづ、まづ、まづ、常より、百姓、まづ、まづ、  
田中より、あゝ、まづ、東照宮、師放鷹のつゝ、まづ、まづ、まづ、まづ、まづ、



と一身の一切をたゞしつゝ一切名もなき者なり  
多くはよき馬より能く堂乃かりしよりなればかたしきも人馬  
の用をあらうとすむ所なり井伊直孝ぬし頼房の時女ありん  
小身の士の家よりきかぬふくたをあらひ居るもさうさ  
きりてかくまひ福をまゝいひてぬんおつゝか上下とも  
武備をともつゝしりねと五十石ともさういふうさう大方に  
了持ありともいけり西より周の世をみわたつゝさうさ武備  
あはれみあつゝ禮記より大夫の富をともつゝ車馬をともつゝあふせ  
りり又大夫は百乗法侯は千乗天子は萬乗なりと軍後をよて  
いふと今の何千石何百石と老穀の高をともつゝさうさ武備の

多あつて、もをきくむう、はするん、その衣服飲食の費を、  
 もたれ、も、武備の用、まを、い、い、い、い、  
 あり、瀬川、益南、東管領、い、い、い、い、  
 之乃、衣、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 ざ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 ち、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 ち、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 武備、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 多、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 ち、い、い、い、い、い、い、い、い、い、



のあひしらひし同しさまにいひあきををそく智なりと成すこと  
 八弱きをを恥し痛き痒きとを思をそひあふりてもつゝぬをそそ  
 一しやせしきしきかひりつひもあはれしきしきし孔子の徳は羣  
 居終日言不及義好行好慧難矣哉との子入りすことか友とら  
 いとあふ時ををの志をしひた孝の道をみうき武逆乃吟味をそ  
 ことそそ義をなふしつふてぬあはれしきしきしきしきしきし  
 ことしひちりしき目を送ゆること初もあふ家もやしきしきし  
 八強毅堅忍の風しありてその禮義廉恥乃心も及るべし士  
 ことそそ禮義廉恥のそゆるはらふしきしきしきしきしきし  
 あし管子のそそ禮義廉恥國之四維四維不張國則滅亡といふ

嗚呼おほいなるや

士氣

士風既<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>なり<sup>一</sup>士氣を<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>一</sup>首要<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>士風を  
 守<sup>ル</sup>も士氣を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>ふ<sup>一</sup>とん<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ぬ<sup>一</sup>風を<sup>レ</sup>外面<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>り<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>  
 とも<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>り<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>ふ<sup>一</sup>と<sup>レ</sup>氣を<sup>レ</sup>體中<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>り<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>  
 あ<sup>レ</sup>る<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>ふ<sup>一</sup>と<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>り<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>ふ<sup>一</sup>と<sup>レ</sup>士氣を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>  
 剛<sup>ク</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>一</sup>は<sup>レ</sup>力<sup>量</sup>を<sup>レ</sup>普通<sup>ト</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ぬ<sup>一</sup>も<sup>レ</sup>氣<sup>臆</sup>ま<sup>レ</sup>ぬ<sup>一</sup>敵<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>ひ<sup>一</sup>  
 徹<sup>ク</sup>と<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>ぬ<sup>一</sup>武<sup>藝</sup>を<sup>レ</sup>巧<sup>ク</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>一</sup>も<sup>レ</sup>氣<sup>臆</sup>ま<sup>レ</sup>ぬ<sup>一</sup>敵<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>ひ<sup>一</sup>  
 と<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>ぬ<sup>一</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>智<sup>ク</sup>も<sup>レ</sup>勇<sup>ク</sup>も<sup>レ</sup>用<sup>を</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>  
 と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>毛<sup>舌</sup>の<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>成<sup>果</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>かん<sup>つ</sup>ふ<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>士<sup>氣</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>

けりまをきかきしりて氣のつゝをさくしりては千軍あつれ中より  
後りきりしりては氣なり君の怒を犯しりて直言極諫しりしりてのま  
なり平居威風凛々しりて人におそれらるゝも此氣中よみつゝぬか  
しりて氣中よみしりては腕ぬきしりて腕ぬけは偶もぬきしりて  
擽ぬけは何の用をもちきりしりて近世士風大におおしりて柔ありしりて婦女のま  
しりてはあしりては高賈のましりてはありしりてははくしりて干城  
乃用しりてはけんやしりては弓矢刀劍をしりてはすの業をやきりしりて其内は  
さしりてははくしりては上をきりては下をきりては佩しりてははくしりて  
しりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりて  
しりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりて  
しりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしりてははくしり

然一かゝるゝつて、好む、すむ、いゝ公侯の後、心も、ま、た、や、ら、れ、ぬ、や、し、い、い、  
 とも、或、を、く、ま、ひ、く、怒、を、ま、ま、り、お、こ、れ、り、孔子申、張、の、ち、を、論、し、て、  
 張、ハ、怒、あ、れ、を、剛、と、い、ひ、し、つ、て、あ、り、さ、れ、ハ、柔、信、廿、ぬ、剛、の、者、と、あ、り、ん、  
 と、思、ひ、し、つ、つ、周、易、よ、つ、つ、て、怒、を、六、室、と、し、怒、の、心、盛、げ、ぬ、と、し、  
 福、の、つ、た、あ、り、か、り、ん、と、思、ひ、し、つ、つ、て、人、と、つ、つ、て、い、ふ、金、淺、の、つ、た、あ、り、  
 ぐ、あ、ん、と、思、ひ、し、つ、つ、あ、り、ん、と、も、頭、を、さ、つ、つ、て、や、ぬ、と、つ、つ、と、事、乃、う、ち、  
 け、り、也、孟子曰、耻、之、於、人、大、矣、と、つ、つ、て、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
 之、つ、つ、古、の、士、ハ、可、殺、不、可、辱、と、い、ひ、し、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
 瑕、と、し、身、を、さ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、辱、と、し、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
 切、後、を、や、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
 繩、と、し、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
 尸、の、上、に



辱といひくまらふは、お向を罷ふあふるくは人によかぬ者あり、  
 榮辱の河汰ありき、きりかききりあひあひいし、士と名つくる程、  
 人と善悪をつらひ恥をあらは、武道のきつらひあふ、とらはあふ、あふ、  
 ちね國に士あり、然とつら、士に氣あふを、士の氣強くまれば、薑の  
 辛うとさうとつら、何の意味ありん、士のとつら、士にさうとつら、國  
 何をとつら、まんさうとつら、それ氣に恥をあらは、慾をわらうとつら、  
 せは、いれとつら、虚恥の心あり、慾をわらうとつら、身のつら、あら、  
 とつら、恥をあらは、身をあらは、あら、あら、あら、あら、あら、あら、  
 世にあらは、思ふとつら、あら、あら、あら、あら、あら、あら、あら、あら、  
 不忘在溝壑、勇士不忘喪其元、あら、あら、あら、あら、あら、あら、あら、あら、  
 此要文を讀

身符として、口は、その、廉恥の心を失ふこと、廉恥乃て、道と失ひ、  
して、禮義の心も、なると、

士節

士氣、その、こと、は、た、は、上、の、節、を、も、と、も、た、は、節、を、は、し、し、竹、乃、  
の、こと、は、た、は、た、は、名、を、り、竹、の、天、を、も、徹、く、の、た、は、氣、を、た、は、た、は、  
あ、た、は、り、ひ、た、は、り、世、を、變、を、た、は、た、は、四、時、を、つ、た、は、た、は、を、二、た、は、  
は、た、は、り、た、は、り、士、の、行、ひ、も、糸、の、こと、は、節、を、た、は、り、世、を、た、は、り、  
た、は、り、故、り、た、は、り、た、は、り、平、居、よ、伊、尹、の、一、人、も、た、は、り、  
事、變、り、た、は、り、玉、蝎、の、忠、臣、ハ、二、君、よ、つ、た、は、り、節、を、た、は、り、死、生、の、際、  
の、こと、は、孔子、の、死、を、守、り、道、を、善、く、た、は、り、  
の、事、ハ、曾、子、の、大、節、を、

のそんく奪りぬきて教りてあつていひくは我も真の用よとて死せ  
即禮義の心ありてあつて氣象ありて死をかんざりて用を  
あつてのさかつて害をもあはしめて死をかんざりて死生亦大也  
あつて死にぬかぬとて死をかんざりて死をかんざりて死生亦大也  
心得かゝつてあつて士人の子とて大方一命の君のものといひて  
いふ所ありてあつて節を失ひて甲斐ありて命を惜むとて  
少くはあつて一時義を敵して死せるといふにありて事変乃万  
存く千変萬化といふもあつてあつて死ぬといふにありて  
すれはあつてあつて徳川家の忠臣義士多きとて小牧乃とて岡崎の  
留守をいひていひていひていひていひていひていひていひていひて

してまゝ死ぬるも亦作左考の外にあらず。本多重次に命せしむる  
 可なり。節をまゝとて死ぬるも亦作左考の外にあらず。可なり。節をまゝとて  
 徳川家も亦節義の士多し。東照宮豊臣関白と仰し和儀とのひて和て  
 まみ玉ひし時冥白 徳川家の寶物を問せしむるに何れもあら  
 ざる。其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦  
 某の問せしむるに亦水火の中をいひしむるに亦命を去る蓋ふるに亦  
 五百人あらず。亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦  
 ありと死ぬるも亦其の問せしむるに亦 徳川家の天下を得るに亦其の問せしむるに亦  
 其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦  
 鎌倉の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦  
 其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦其の問せしむるに亦

堂々仲時よあまのひく腰切ももの数万ふひひりそ外法國よそ  
死せし者も終をあらすそむつら士氣乃つときをあらす丁はれは北條  
ひうそあらそまほひく一人も非をいそ逆をとむそむあく平統の  
天子よむひまうく弓をひき力をあらひそものもあはれ武士の鑑  
といひくそつひう大やると北序國よ上下二千餘年のあはれ武士の  
いそつひく人い楠中將よそそそあはれ楠公平統の天子よそあはれ奉りて  
義兵をあらす一族郎黨まうそむひりそ義をあらす郎を守り父あて  
子代り兄死くそつひく教代の後すそ中將のあをすそつひく死を  
そそ王室を守護すそむひりそそそあはれ張巡文天祥やそあ  
しりそそそあにそ道法をそそそ人心を振まそ事い徳葛孔明よそ

とらまふり多ふし、かく右義を同し不能ぬ、内にも大に深淺の違ひ  
あはれ、すゝも常々度きをうまひ、あふまじ、誠中忠孝、人倫乃  
大節、まじく、今もされ、人々のあはれ、あはれ、孝、うけ、  
人々、其餘、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
君又師、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
死を、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
其カ事、君致、其身、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
君、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、

泰伯のついで子として不孝に死し、臣として不忠に死するといふとおなじくおなじく君父まつて之をまつまらざる常にも愛するもついでに心得あり平日とくと講究して、これに心をこめんとて死に至る者あるとて、これを得ては厚く之を信實よしおなじく簡要あり。

士心

氣節はよくよく善士といふ下、それと氣節の源を心よつては、源をさして、これとこれ流れる清く之は、人の身は四支百體とありて、おなじくその徳あり、心のこころは、以て氣節とて、さうか、さうか、故に心の方、乃ち、ちよあり、と、さうと、一身乃ち主宰、これに心をえあはれ、又平、さうと、さうと、さうと、士のう、徳をい、さうと、さうと、道、さうと、さうと、を、

志の字は論語に士志於道の語あり、さう志の字はもと士心乃  
 二字をあつて、さう文字が、さう志の心は志あつてさうあつたさう  
 形なり、志と心とを道は志はさう外あり、道はさう治さう、己を治め  
 んを治さう、か、さうさうか、さう人と思ふ、孔子の子路の君子を  
 と、さうさう、脩己以敬、脩己以安人、このさう、己を治め人を治  
 めさう、孔子、宋の周子の治り、士希賢、々希聖、々希天、さう、これ  
 こ、さう、か、さう人、さうさう、さう、己を治め人を治め  
 志をさう、さう、恒心あり、恒心あり、孟子は無恒心、而有恒心者、  
 惟士而已矣、さうありて、死生乃際、よのさう、貧苦艱難の場、さう、  
 さう、さう、さう、治め、労働、孟子は或労働、或勞力、労働者、食人、労働者



食於人食於人者治以食人者治於人ありて民をふひんと思ひてさうふ  
 らく治あり、されど恒心ハ士の節操あり、勞心ハ士の經濟なり、さう一經  
 濟と、民人社稷を司と、さう行ふべきと、其職あり、さうさう  
 いふもと疑ふべし、左とあり、此も同とあり、士とあり、此ハ四民の首とあり、耕  
 たり、織たり、て食ひ、織らば、作して衣、さうものなり、此も、耕一織とあり、  
 勞とあり、此も、此も、此も、孟子ハ窮獨善其身、達兼善天下と  
 あり、同、士も窮達のさうあり、其時、さう行ひのさうあり、  
 十、この位、あり、此も、此も、孔子も、さうあり、  
 十、さうあり、天下を兼ね、善くあり、樹と、常と、心得、さうあり、  
 行ふ、さうあり、さうあり、文、武と、達一、天下

ちれど形天下をこころもつて術よく窮達さうひあるまゝ一呂東某の官箴よ  
 勞心不如勞力とありて士の心を勞して職分をつとめしつゝも百姓の力  
 を勞して人をやせんま及ざるをとりて恥しきことありすや  
 おのれある竹西三士と野外まゝあそびしと折あし秋のまゝつらまゝ  
 百姓とまじりて稲をとらみてあそびしれ、同行の人とむらひいひつゝは  
 おのれとまじりてもよ百石二百石の祿湯りてやまゝ世をワたりかくあそびお  
 りとあとし上ハ君の脚恩をいつき下ハ百姓のうけくらゐをあらはせぬ  
 とわり妻子と終ると老後のさうひもあくとつとれ十家二十家あ  
 らくハワらしむかゝ一家をやあふと能くをあらまゝうりて百をくし  
 て職分を怠らば天罰を蒙るべしといひてあそびされば士とつとれ









ありしは迂濶ありしは中より思ふを了らあつてはれはこゝの六の好  
しきぬをうら思ひのあつて聖人を作しそは道をうらぬあき  
らるる今日人倫の上り及びて義の至道をととむること實の學問と  
つたふれ、眞の士道とては道なりとてうらむるは不ふれ、近世武弁乃  
家ももあつて武士道とては事ありき、この定りといふことあつて  
も、この道なりとてあつてもあつても、私心偏見をまぬらひし  
まし、そのはひらうらをいせん、追ひちかき、そのをさるる、  
命の人をさるる、そのをさるる、義とては、その類、  
孟子のつて、下義の美かといふら、  
そのあつて、そのはひらうら、そのはひらうら、  
強盜、武士、乃、そのはひらうら、  
そのはひらうら、そのはひらうら、そのはひらうら、  
そのはひらうら、そのはひらうら、そのはひらうら、

~~~~~  
西人の道を~~~~~されはあらう~~~~~賊とあ~~~~~ありす  
氣節を~~~~~死を~~~~~も勇をやり義をや~~~~~あれハ  
西人の道を~~~~~その至當を~~~~~あ~~~~~真の古道~~~~~  
~~~~~東照宮天下を~~~~~先室町家~~~~~人の心  
あり~~~~~臣~~~~~君を弑~~~~~父を弑~~~~~  
~~~~~思ひ~~~~~人の道を~~~~~先儒を~~~~~  
~~~~~先史の教~~~~~板~~~~~ひ~~~~~世~~~~~  
~~~~~宗室大臣を~~~~~先外ハ侯伯の~~~~~學~~~~~名~~~~~  
~~~~~今迄を~~~~~室町家~~~~~代~~~~~  
畫板の~~~~~ひ~~~~~ひ~~~~~ひ~~~~~ひ~~~~~  
~~~~~室

町ありて移すもわく法はよくて亡びてをうくるは北の備  
 うらまへ。文治のころもあまをまゐる人さうも北室町家乃時  
 とくも切法あつてつれ細川頼之今川真世がころん皆  
 牛学大あつてさうきさね室町つてころんあも心とうさうさう  
 さうあつてつれころんさうつて正統の天子まつえあつて精忠大平義古  
 よひつて桶中将備後之郎ころん武兼備乃ころん備後之郎  
 戒るの向けしれあつてころん書をよみ撰りつてつれ両白ころん  
 それころんさうあつてころん桶公死し勝んて其子西行ぬ  
 遺戒ころんつれ内ころん孫幼学まてころんさうさうさうさうさう  
 武家の大桶小桶乃ひ備後之郎公家の義房の中納む北畠の準后





ちくちく人の忠義天性よくよくよくと大義の府らうくくく  
 遺憾あきらむ学の功とわやうをたのむの英雄信玄、謙信をくくく  
 文才ありし人らうはあきあきあき、實學とつひに加賀の利家卿、加藤主  
 計頭のとありしをたのむのとあひくく学りてよあき神くまき  
 とくをたのむりて今の學者とくくくくくくくくくくく  
 二好のくを備くく文運のひくく人く北ありとくくさあ  
 んさくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 の帝仁德、菟道トの稚郎子ウラコの皇子のくく、實學と志をくく、中昔の師代  
 くとくく、天智の帝、鎌足、道真の大匠あくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 隋唐華麗の風を志をくく

衣冠官制之唐風、  
 禮樂文物、  
 眞の聖人の道を、  
 玉を還す、  
 經典、  
 遣唐使、  
 皇國、  
 佛法、  
 王室の衰、  
 學問、  
 風、  
 道、  
 我大帝國祖宗の道、  
 神、



をそとと思ひぬむ。有職故實を以て、閑東もその制度を  
行ふと云ふは、事ゆゑをもつて、さういふ人もある。  
東照宮の所遺訓にも、武家の公家をよむと云ふは、  
さういふ。有徳公所世のち、白石の建儀、  
はらちて、祖宗のちも、真のみ武を以て、東照宮の  
所定をより、あり、東照宮の所定と、武家  
徳法なも、第一、あり、文武の道、  
み武の道、二、あり、武あり、  
文あり、武切を、  
文を、さういふ、  
武人の武、  
神武、  
般、  
の武

をまゝとればあらずいね何れも真のみ武の道とらふべし  
 送らんとあらず車の両輪との両翼のまゝひらきつをまゝとらふべし  
 ころあらず漢のまゝ松を儒をいぬ君あらず陸賈をまゝおれぬ叔  
 孫を穢しあらず馬の上をまゝ天下を治るは織田右府の武を大ね  
 びね義昭の將軍も學をまゝ稲葉一徹の畫賛をいぬまゝ  
 うらむつとるまゝ無名學をまゝあらずあつねつみのやま  
 あれつとるまゝ英雄の才といふまゝ東照宮の千古のひびく  
 才徳といふまゝませつとるまゝ學の人のと益あるまゝをまゝ  
 干戈いふまゝあつねつとるまゝ海内をいぬ教をひらけつとるまゝ  
 されつとるまゝ我國の人の種をいぬ艱苦を常の國の風土をいぬまゝ



いづれ上りてゆくみちを遠くゆくみちならしむよきありせら  
天保のゆかりなる年をも

安徳のゆかりなる年をも

右士道要論一卷伊勢齊藤有終所著言雖淺近  
然士道之要可謂盡矣予讀而嘉之乃刻于家以  
示從臣等使有所矜式焉

嘉永庚戌三月

甘雨亭主人識



臣田邊保固謹書

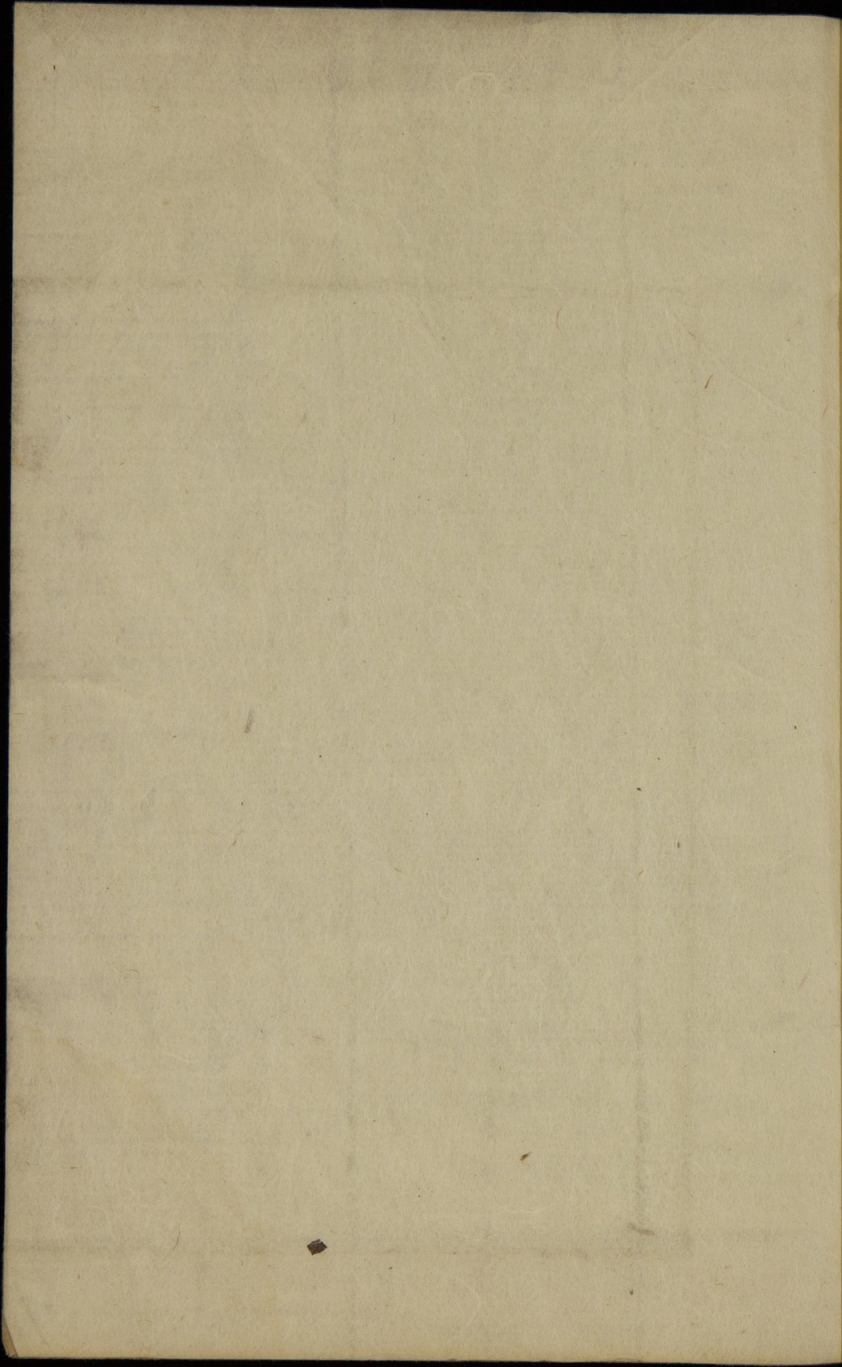
二道要論


甘雨亭

七  
道  
要  
論

三  
藏  
板





 三重県立図書館



140077454